

キャンパスライフサポートに求められるもの (第4報) — 来談時期と利用目的についての特徴から —

山倉 辰裕¹⁾・東海林優希¹⁾・花村 知子¹⁾・村松公美子²⁾・丸山 公男³⁾・熊谷 綾子³⁾

- 1) 新潟青陵大学キャンパスライフサポート室
- 2) 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科
- 3) 新潟青陵大学健康管理センター

キーワード：キャンパスライフサポート、学生支援、来談時期

Roles Required for a Better “Campus Life Support” — The period and purpose of taking counsel —

Tatsuhiko YAMAKURA¹⁾, Yuki TOHKAIRIN¹⁾, Tomoko HANAMURA¹⁾,
Kumiko MURAMATSU²⁾, Kimiko MARUYAMA³⁾, Ayako KUMAGAI³⁾

- 1) Campus Life Support Room of Niigata Seiryō University
- 2) Graduate school of Niigata Seiryō University, Department of Clinical Psychology
- 3) Health center of Niigata Seiryō University

Key words : campus life support, student support, consultation time

I. はじめに

新潟青陵大学キャンパスライフサポート室（以下：サポート室）は、2009年に開室し、現在まで、年度毎の利用状況について比較検討（岡田ほか2010）や、年々利用人数や件数が増加傾向にあることや学科や学年によって利用や相談に対する要請が異なる状況について報告してきた（山倉ほか2011）。しかし、どの時期に各学年・学科の利用頻度が増加するのか、どのような相談内容が多くなるのかなどについて、実際の学生支援の現場で要請される視点からの検討はまだ行っていない。また、平成27年から卒業・修了予定者の就職・採用スケジュールが変更され、年々、早期に開始されてきていた就職活動時期が、3ヶ月繰り下げられることになり激変が予想されている。この状況の変化に応じて、学生の動向も大きく影響を受ける可能性があり、学生支援においても、柔軟な方向性を持つ必要がある。本稿では、学生の来談時期を比較することで、各学科・学年が、どの時期にどんな問題を抱えて来談するのかについての方向性を検討することを目的とした。また特に

就職活動と関連の深い、進路選択を意識し始める時期、実習時期などと来談時期との関連性についても分析し、今後の学生支援においてサポート室の位置づけに反映させる方策を検討する。

II. 方法

サポート室に保管してある平成22年度から平成24年度（2010年4～2014年3月）までの3年間のデータについて、再集計を行った。初回来談の385人を集計の対象とし、2回目以降の来談については対象外とした。学科によって3年間の利用人数や利用目的に差はあるが、学科全体での比較については、すでに前述どおり報告（岡田ほか2010、山倉ほか2011）してきたため、本稿では省略している。

III. 結果

1. 利用頻度

- (1) 各月の利用頻度
3年間の各月の利用頻度を各月の利用人数から集

計した（図1）。最も多かった月は「4月」67人（17.4%）であり、次いで「6月」「11月」58人（15.1%）、「5月」55人（14.3%）と続いた。大学が長期休業となる8～9月、12～1月、2～3月の期間は、サポート室も閉室期間を設けるため、それに伴い人数も少なくなっている。

1年を4～9月の「前期」と10～3月の「後期」に分け、更に3ヶ月ごとに「前半」と「後半」の4つに分けて利用人数を集計したところ、「前期前半」46.8%、「前期後半」、12.7%、「後期前半」31.9%、「後期後半」8.6%であった。これらのことから学期前半に利用人数が増える傾向があることについて把握された。

(2) 学科別利用人数

3年間の利用人数を合計したものを、各月・各学科別に集計した（図2）。最も来談人数が多かった月は、看護学科「4月」、福祉心理学科「4月」「5月」、幼児教育学科「10月」、人間総合学科「11月」であった。すなわち、学科によって利用人数が多くなる月が異なっていた。

(3) 学年別利用人数

利用人数を学年別に集計したものを表1に示す。また各学科で、月ごとにどの学年の利用が多いか比較した。

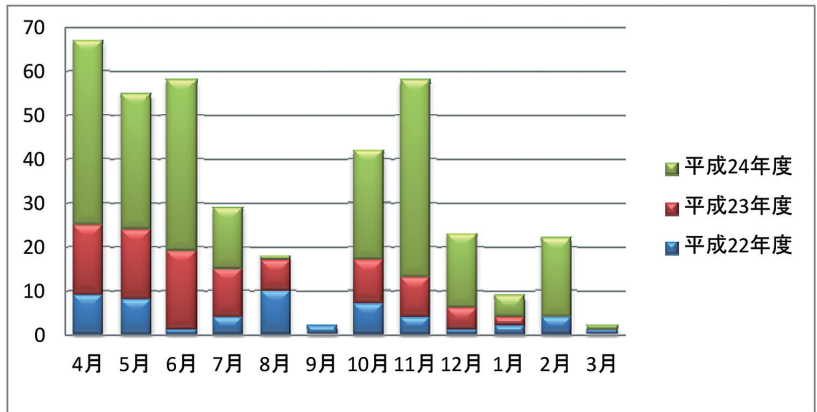


図1 各月の利用人数

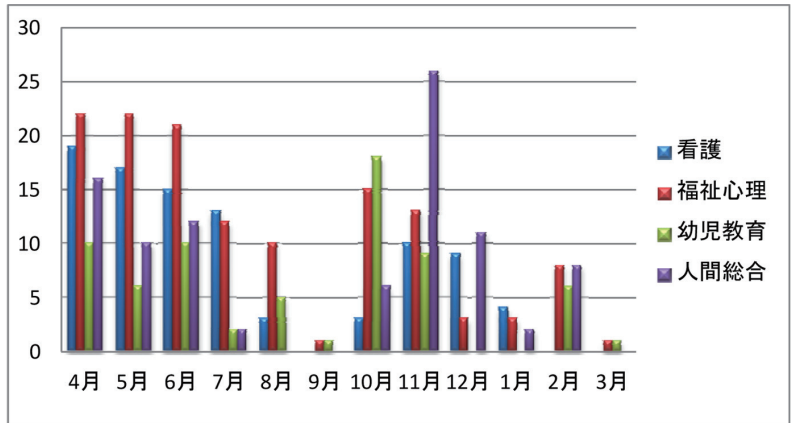


図2 学科別利用人数

表1 学科・学年別利用人数

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
看護	10	7	24	52	93
	10.8%	7.5%	25.8%	55.9%	100.0%
福祉心理	24	22	50	35	131
	18.3%	16.8%	38.2%	26.7%	100.0%
幼児教育	37	31			68
	54.4%	45.6%			100.0%
人間総合	61	32			93
	65.6%	34.4%			100.0%

1) 看護学科

「4年生」55.9%と4年生が半数以上を占める結果となった(図3)。1~2年生の間に利用する学生は少なく、3年生後期から利用が増加し始める。4年生の前期にピークとなり、その後の利用は減少する傾向が認められる。

2) 福祉心理学科

「3年生」38.2%と3年生が最も多かった(図4)。他の学科にはない福祉心理学科の特徴として、1年生前期の利用が多いことがあげられる。1年生前期

以降、2年生後期までは低く推移していく。3年生になると、年間通して利用は高く推移していき、4年生の4月をピークに減少し、4年生の8月に一度利用が多くなるのが特徴である。

3) 幼児教育学科

「1年生」54.4%とやや1年生が多い結果となった(図5)。1年生10月でピークとなり、2年生10月までの1年間はある程度の利用はあるが、それ以降になると新しく利用する学生は認められなかった。

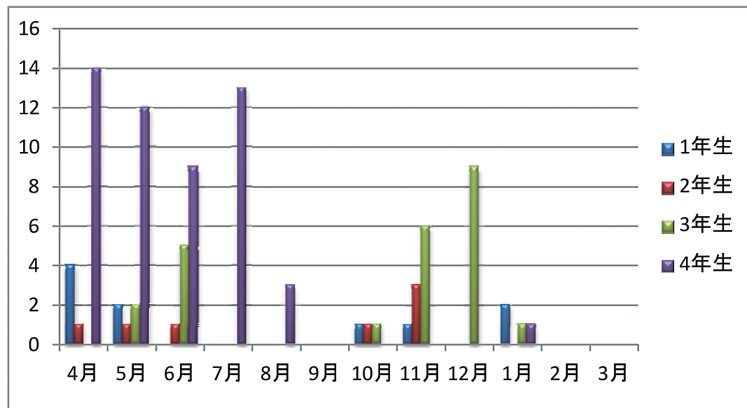


図3 学年別利用人数 ①看護学科

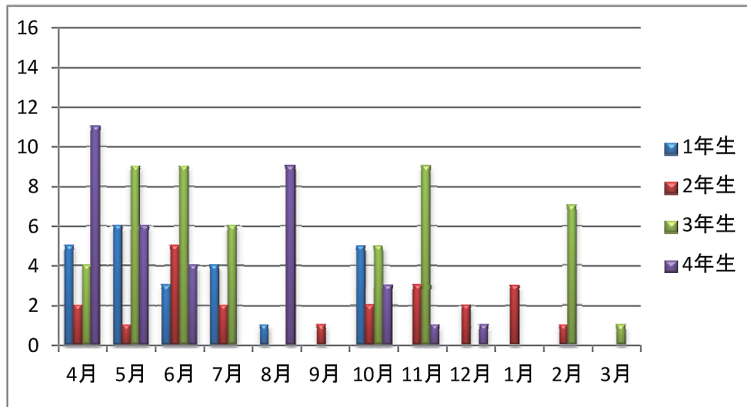


図4 学年別利用人数 ②福祉心理学科

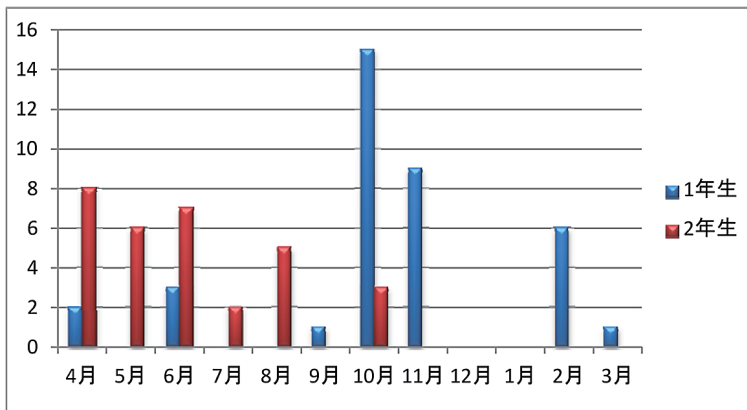


図5 学年別利用人数 ③幼児教育学科

4) 人間総合学科

「1年生」65.6%と2年生に比べると、2倍近く多い結果となった（図6）。1年生の4月～7月に掛けてある程度の利用があり、11月にピークとなる。2年生の4月でもう一度利用が多くなり、10月まである程度利用が継続するが、その後利用する学生は認められない。短期大学では、10月以降の新規利用者は減少傾向となる。

2. 利用目的と相談内容

(1) 各月の利用目的

サポート室を利用した目的を月ごとに集計した（図7）。「相談」は「4月」25人（20.7%）が最も多く、「心理検査」は「11月」42人（17.7%）、「職業検査」は「2月」4人（28.6）が最も多かった。「休憩」と「その他」に関しては、全体数が少なく、比較検討していない。

(2) 各月の相談内容

利用目的「相談」の内容について、月ごとに集計

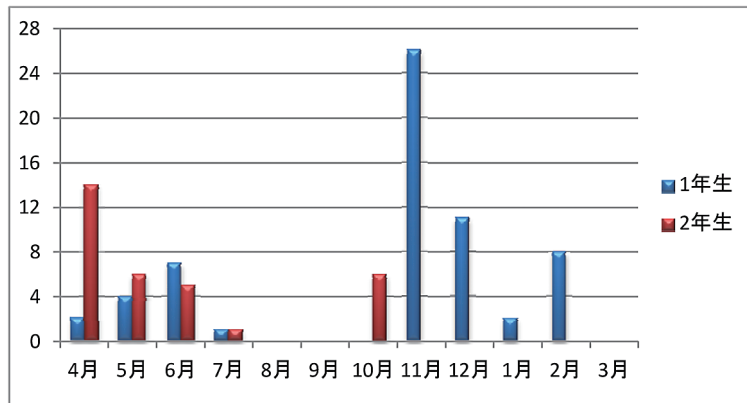


図6 学年別利用人数 ④人間総合学科

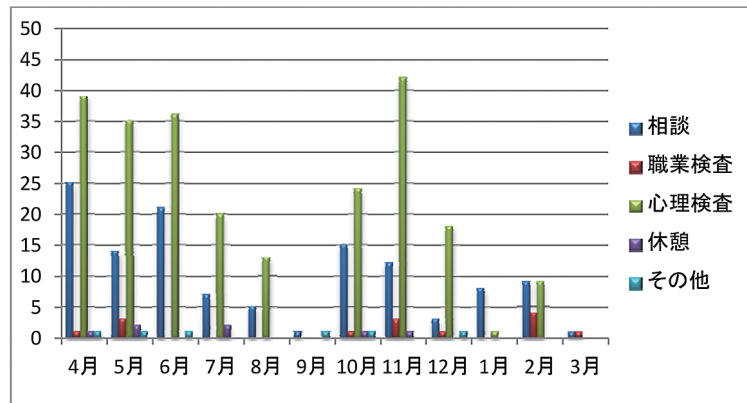


図7 各月の利用目的

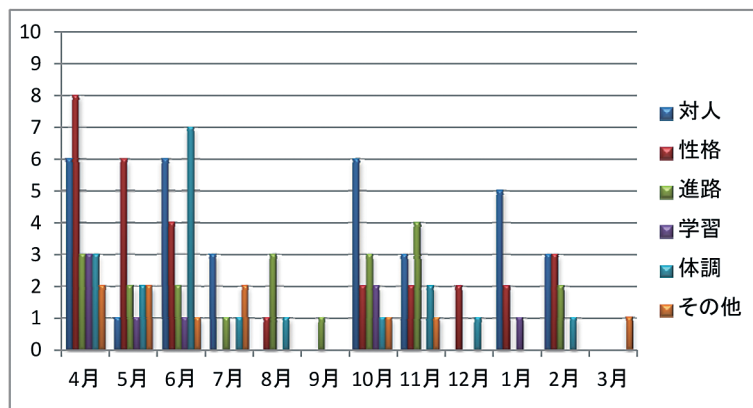


図8 各月の相談内容

した(図8)。内容は「対人」(友人・家族・ゼミ・サークル・恋愛)、「性格」(性格・適性)、「進路」(進路・就職・進学・将来)、「学習」(履修・実習・資格)、「体調」、「その他」(色々・どうしたらいいかわからない・近況報告など)の6つに分類した。

それぞれ「対人」は「4月」「6月」「10月」、「性格」は「4月」、進路「11月」、学習「4月」、体調「6月」が最も多かった。「その他」は全体数が少なく、比較検討していない。

(3) 学科別利用目的

利用目的を学年別に集計したものを表2に示す。各学科で、月ごとにどの利用目的が多いか比較した。「休憩」と「その他」は全体数が少ないことから比較検討していない。

また、利用目的の「相談」の内容についても、学科別の人数が少ないことから比較検討はしていない。

1) 看護学科

「相談」は「4月」が最も多く、次いで「11月」「1月」となった。「職業検査」は全体数が0人だったため、比較していない。「心理検査」は4月～7月の利用が、1年間の利用の大部分を占める結果となった。

2) 福祉心理学科

「相談」は「4月」が最も多く、次いで「6月」となった。「職業検査」は「5月」が最も多かった。「心理検査」は「5月」と「6月」、次いで「11月」が多かった。

3) 幼児教育学科

「相談」は「6月」が最も多かった。心理検査は「10月」に集中しており、「4月」の2倍の利用頻度であった。職業検査は「2月」が多かった。

4) 人間総合学科

「相談」は「4月」と「5月」が多く、心理検査

は「11月」に集中しており、職業検査も「11月」が多かった。

IV. 考察

1. 来談時期の特徴

利用頻度は、4～6月の「前期前半」と10～12月の「後期前半」に高い傾向が認められた。4～6月は入学や進級などによって、履修する授業内容が変わり、学生生活の変化が大きく、ストレスを感じやすい時期である。特に1年生は高校と大学・短期大学の学修や環境面での変化によって、心理面においても大きな影響を受ける。高校時代は、受け身的な学校生活であったとしても、大学・短期大学においては、卒業に必要な単位を計算し、履修届を自ら提出して授業を受ける能動的な姿勢が要求される。高校時代と異なり、講義ごとに教員も一緒に受講する学生も異なる。親元を離れて、初めての一人暮らしによって日常生活そのものにおいても、大きな変化が起こる。アルバイトやサークル活動を新たに始めることにより、そこでは新たな人間関係を築かなくてはいけない場面が生ずる。高校時代まで、慣れ親しんだ人間関係であった場合、大学や短大で、初めて出会う異なる次元での人間関係の構築が要求されることから、高校までは順調に過ごしてきた学生においても、心理的ストレスを感じる場面が想定される。学年が進行すると、カリキュラムの中には演習や実習などが組み込まれ、より実践的になり、自ら決断し判断する主体性が求められる。自分の考えを文章や言葉にし、他の学生と共同で取り組むことや、ディスカッションを行うことも要請される。専門職を目指す学生は、学年の進行により、授業内容がより専門性を持った高度なものになり現場での実習が必須になってくることから、確固とした将来像と動機づけが要請される。

表2 学科別利用目的

	相談	職業検査	心理検査	休憩	その他	合計
看護	25	0	65	3	0	93
	26.9%	0.0%	69.9%	3.2%	0.0%	100.0%
福祉心理	62	5	57	2	5	131
	47.3%	3.8%	43.5%	1.5%	3.8%	100.0%
幼児教育	11	5	52	0	0	68
	16.2%	7.4%	76.5%	0.0%	0.0%	100.0%
人間総合	23	4	63	2	1	93
	24.7%	4.3%	67.7%	2.2%	1.1%	100.0%

利用目的として「相談」が4月に最も多く、相談内容として「対人」、「性格」、「学習」が4月に多いことは、上述した学生生活の変化が影響している可能性がある。相談内容「体調」が6月に多くなるのは、4月から新しい環境に適応しようと心身に負荷を与えた結果、「心身の不調」として出現してくる過程が推察できる。10～12月の利用頻度が高いことは、進路選択・就職活動の動き出しの時期と重なっていることが推定される。後期始めの10～11月に利用目的「心理検査」や相談内容「進路」が多くなることから、進路選択や就職活動に向けて周囲が始動する中、様々な心理的な不安や焦りが生じ、利用のニーズが高まることが示唆される。これらの動向は学科によって異なるため、詳細は後に述べることとする。また前期と後期の初めに行われるオリエンテーションは、相談の動向に影響を与えたことが推定される。オリエンテーションには、キャンパスライフサポート室相談員が直接足を運び、サポート室の開室時間や利用方法、グループワークなどの企画についてアナウンスする。普段はチャシやホームページを通しての情報発信が多いため、相談員が、直接学生に対峙し、情報発信できる貴重な機会となっている。最近、短期大学1年生後期に実施される、学内ツアーのコースの中で、相談員が学生とさらに近い距離で接することができるようになった。今まで利用したことなかった学生も実際にサポート室の中に足を踏み入ることとなり、「全く知らなかった場所」が「一度は行ったことのある場所」として経験する。オリエンテーションがサポート室を利用するきっかけとして大きな役割を果たしていることは、今まででも報告してきたが、今回の結果からも改めて再認識する結果となった。

2. 学科・学年別の特徴

サポート室で心理検査や職業検査を実施する場合には、学生に検査を希望した目的を尋ねることにしている。その多くは、就職活動や履歴書の作成に活かしたいといったものである。また、自身の性格や家族のことを主訴として来談したとしても、学年が進行すると進路選択に関する話題が出てくる。ここでは、大学、短期大学の各4つの学科・学年別の来談時期の特徴について、進路選択との関連を中心に考察する。

看護学科では助産師、保健師、養護教諭など、看護師資格をどの分野で活かしていきたいか選択しな

ければならない。その希望を調査するための用紙が就職課より配布され、3年生の12月に提出することとなる。調査用紙を書く前に、心理検査を受けておきたいという学生が多いため、3年生の11月と12月で一時的に利用頻度が増加している。また、看護学科の就職活動は4年生前期から活発に行われるため、それに伴う相談や、心理検査に対するニーズの高まりから、利用頻度もピークとなったことが推察される。看護学科における進路選択は、上述した通り、看護師資格を取った後の進路選択の問題がほとんどである。そのため、一般企業や他の職種に進むかどうかの選択で迷う学生は少ない。幅広い職種の中から興味や適性をみていく職業検査の利用が全くないのは、看護師資格の取得が卒業の前提、進路選択の前提となっているともいえる学科の特色が関係している。

福祉心理学科は「ソーシャルコース」「福祉ケアコース」「子ども発達サポートコース」「心理カウンセリングコース」と4つのコースに分かれているのが特徴である。一般教養などのコース共通の科目もあるが、学年の進級により、演習や実習を含む専門科目が増える。1年生前期の利用が多いこと、利用目的「相談」「職業検査」「心理検査」が4月～6月に最も多くなることから、入学・進級の環境が変化する時期に、利用が増える傾向があると推察される。3年生が一番多く利用する要因として、進路選択を強く意識せざるをえない現場実習の体験が関与している可能性がある。2年生と比べて実習期間は長くなり、内容もより密度の濃いものとなってくる。実際の現場を肌で感じ、改めて自分の進路や将来を考えた時に、迷いが生じる学生が多いのではないだろうか。看護学科と大きく異なっているのは、一般企業も選択肢として選ぶ学生が多いという点である。また、もう一つの選択肢として、就職せずに本学大学院臨床心理学研究科に進学する道もある。進学か就職か、就職するのであれば専門職か一般企業か、専門職であればどの資格をどの分野で活かすのか、進路選択の自由度が高い分、迷いが生じやすいのである。「相談」が4つの学科の中で一番多いのは、一回のみの心理検査や職業検査を受けただけでは、自らの進路を決定しにくいことが影響している。就職活動期間は、一般企業を目指す学生は3年生の早い時期から始まり、専門職を目指す学生は4年生の後期まで続くなど、活動期間は目指す進路によって異なる。4年生の8月に一度利用頻度が増加

するのは、専門職を目指す学生からの利用のニーズが高まるからだと推察される。

幼児教育学科では、多くの学生が幼稚園教諭二種免許と保育士資格を取得し、幼稚園や保育所に就職する。一般企業の就職を目指す学生もいるが、少数である。短期大学は就職活動の開始が比較的早く、1年生後期から活発になる。後期に入って就職活動を始めた学生が自己理解を深める目的で来談することから、「心理検査」が10月にもっとも多くなる。2月は就職活動が進行するにつれて、さらに自己理解を深めて適性を知ることを目的として来談する学生が多いことから、相談内容も「職業検査」が多くなり、これらの学生の中には、一般企業への就職も検討している学生も含まれている。

人間総合学科は、介護コースを除けばほとんどの学生が一般企業を選択する。また、取得できる資格も一般企業の就職に役立つような事務系の資格が多い。事務系の資格の場合は、福祉や介護の専門職には要請される現場実習はない。途中で大学へ編入する学生もいるが、ごく少数である。就職活動の開始は、幼児教育学科と同様に1年生後期からであり、そのため、「心理検査」と「職業検査」が11月に集中している。一般企業への就職が多いため、早く内定が決まる学生は、2年生の前期には就職活動は終了している。しかし、内定が決まらず活動が長期化する学生や、就職活動中に進路選択に迷いの生じる学生も存在する。そういった学生が2年生の後期に入って、新規の来談に至ることもあり、2年生の10月の利用率が増加している。

3. 今後の取り組み

今回の結果から専攻する学科や時期によって利用頻度や利用目的、相談の内容に特徴があることが示された。今後は、それぞれの学科における来談の特徴やニーズに合わせた取り組みを進めていくことにより、さらに柔軟で質の高い学生支援に発展させることが可能になる。利用頻度が増加する前期と後期前半、特に4～6月と10月～11月においては、相談員がより学生側のニーズに応じて近接した取り組みを実施していくことが、全学科・学年において効果的に働く可能性がある。4月～6月は入学や進級によって対人関係の変化から、心理的ストレスを感じ、環境への不応感を持つ場合が生ずる。不応感と同時に自己理解への関心が高まり、場合によっては、自覚的に心身の体調不良として現れてくるこ

とがある。従来実施していた、心理検査を用いて自己理解を深めるグループワークに加え、「対人関係の築き方」や「ストレスマネジメント」をテーマとした、より大人数を対象としたセミナーや出前授業が新たな試みとして挙げられる。10月～11月は就職活動を開始している学生、すでに活動している学生への支援を強化していくことが必要である。今までは、サポート室として、対象を絞らない全学向けのグループワークに加え、学年・学科別で対象をある程度絞ったものも開催してきた。今後は、「一般企業を考えている学生」、「専門職を考えている学生」など就職活動の内容で分けることや「これから就職活動を始める学生」「すでに就職活動を進めている学生」などの時期別にすることなど、就職活動の内容や時期について、ピンポイントで対象を絞ったグループワークを試みることも検討している。「進路をどう選んでいくか」、「就職活動への心構え」などのテーマで、セミナーや出前授業を開催することも試みとして考えられる。開催に当たってはキャリア支援課やキャリアサポートステーションなどの学内の他部署との連携した動きが前提となる。

実習や就職活動の時期、進路選択の幅という観点から今回は考察したが、学科全体の雰囲気や学生間の対人関係などについても、それぞれの学科ごとに特徴はある。今までも、他部署において、学科の特徴や学生のニーズの把握のために、学生へのアンケートを実施した検討が行われている。しかし、教職員へのインタビューやアンケートなどは実施してこなかった。教職員から見た学生の特徴やサポート室に対するニーズを把握するなど、教職員へのアプローチも学生支援活動の充実には欠かせない。今後、サポート室としては、キャリア支援課やキャリアサポートステーションなどの学生支援に直接関わる部署との連携はもちろん、普段、学生により身近に関わっている学内の様々な立場の教職員との連携についても、今後取り組むことにより、より質の高い学生支援を提供できるように努力を重ねたいと考えている。

V. まとめ

キャンパスライフサポート室の3年間の利用状況について、来談時期や利用目的の視点から集計を行った。その結果、前期では4～6月、後期では10月～11月に利用頻度が多くなること、各月によって

利用頻度や相談目的、相談内容が異なっていた。さらに各学科・学年による来談時期、相談目的および内容に特徴が認められた。実習や就職活動の時期、進路選択の幅という視点を中心に考察し、今後の取り組みについて検討した。本研究では、3年間に限定されていることや、来談時期や相談目的および内容についての集計結果のみの検討であり、相談内容の詳細な質的分析までには至っていない。今後は、さらにデータを蓄積し、相談内容についても質的分析を行うなど、より多角的な視点から検討を進めていきたい。

文献

- 岡田淳子・山倉辰裕・薄木佳苗・村松公美子・熊谷綾子
(2010)：キャンパスライフサポートに求められるもの
—臨床心理士の立場から—（第1報） 『新潟青陵大
学大学院臨床心理学研究』 4、33-40
- 山倉辰裕・薄木佳苗・花村知子・村松公美子・熊谷綾子
(2011)：キャンパスライフサポートに求められるもの
—臨床心理士の立場から—（第2報） 『新潟青陵大
学大学院臨床心理学研究』 5、49-57